

『柳田國男の民俗学』で論じられた柳田國男

—第2章「方法と歴史認識」を中心にして—

ナランビリゲ*

はじめに

福田アジオの『柳田國男の民俗学』（1992、吉川弘文館）は、柳田國男の一生、すなわち、「異なる学問、異なる関心を持っていた」彼の生涯を評価し、柳田の民俗学者としての「方法や研究体験を検討した」書物である〔福田1992 3〕。ここでは、本書第2章「方法と歴史認識」（四つの部分から構成される）を取り上げて、福田の柳田國男についての評価、及び批判を検討してみたい。

一、「歴史研究方法批判」について

福田は、民俗学という新しい分野を開拓し、民俗学者の視野から歴史を認識して、歴史を読み替えるという柳田の見方を評価する。具体的に「郷土誌編纂者の用意」（1914年9月に自分の発行している雑誌『郷土研究』2巻7号に掲載）を取り上げ、柳田の個人的興味関心で研究していた新しい学問について、その方法や前提になる歴史認識を明確に示した最初の論文であると指摘している〔福田1992 60〕。これは従来の史学が対象としてきた「貴人と英傑」の歴史的出来事を「歴史」として叙述してきた方法論についての柳田の批判であり、福田はその主張について客観的な評価を与えている。

柳田は歴史の研究が文章資料に依拠して行われているという「一般的な常識」を批判した。具体的に言えば、「郷土誌編纂者の用意」において、それまでの歴史の記述が、いかに名もなき、ごくありふれた人々を無視してきたかと指

摘して、従来の史学の研究方法を繰り返さず、新しい研究方法で歴史を取り扱う必要性を主張している。

福田は、1934年の『民間伝承論』、1935年の『国史と民俗学』と『郷土生活の研究法』の中の柳田の従来の史学の研究方法についての批判について論じている。主に『郷土生活の研究法』を取り上げて、「文書史料の偏在性と作為性を指摘してその限界を論じた」歴史研究の欠点を指摘したものと論じ、旧来の歴史研究の無能な点や問題点を強烈に指摘し、それに代わるべき方法として自分の研究法を提示する主張の仕方を、民俗学の学問的確立に努力したと福田は柳田を評価している〔福田1992 62〕。

柳田の学問的主張は、日本の史学の新しい方法論づくりにおいて見落とせないものとして位置付けられている。つまり柳田史学の貢献は、史学に新しい方法論を提案していることであると評価している〔家永1953 95〕。文献を唯一の史料とする従来の史学は批判され、考古学による物質的遺物を重要な依拠とし史料として取り扱えるということも言及されるが、史学の方法論としてはこれらの方法論だけではなく、民間伝承や民俗資料から歴史的要素を探る必要性が言明される。更に、柳田は、遺物として残存される金属や石材で作られたものだけが取り扱われて、腐り易い藁や木材で作られたものを見逃すという特徴について論じ、考古学の限界あるいは弱点を指摘し、史料として取り扱われる範囲を広げる提案をする。換言すれば、史料の分野で「常民」の生活史を追加することである（具体的な分析は第4部を参照）。

とりわけ、柳田の従来の史学の研究方法論についての批判を分析し、「丸菓のような民衆」と「採集記録の発見」との2つの面から論を展開し、柳田を民俗学という新しい学問的分野の確立に努力したと位置づけ、評価している。

二、「比較研究法」について

柳田の比較研究法は単に新しい資料の存在形

※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

態だけでなく、この資料のあり方との関連で重要な存在として浮かび上がってくる新しい方法の発見である〔福田1992 64〕。

実際、本書第2章の4つの構成の中で、この比較研究法についての評価は重要な論点として、取り上げられていると考えられる。

柳田の「寄せ集め重ね合わせ」る研究はいわゆる比較研究法を示唆し、採集資料である「くり返し見せてくれる現実の行為」に依拠したもののこそ柳田國男のいう民俗学であり、この民俗学が経世済民としての歴史研究になる。したがって、この比較は「新たな歴史」を描くための方法であり、柳田自らは、門弟や大学での講義では、「重出立証法」と呼んだ〔福田1992 66〕。

柳田はしきりに重出立証法という言葉を使用した。その具体的な説明はほとんどないことに気づいた福田は、論を展開する。それを原典で言えば、「比較研究法と同義語として使用されているだけであり、重出立証法としての特別な資料操作法や手続きが示されてはいない。他のところで比較研究法といっているものと同じ内容である。それを重出立証法とわざわざ呼んだのは、一つには目的が変遷をあきらかにするという限定された比較研究法であるという自覚があったことと、独自の用語を使用することで独自の学問として存在することを示そうとしたといえようが、それにこめられた意味は旧来の歴史研究との相違を強調し、人々が旧来の歴史研究の方法と対比させて理解できるようにしようとした点であろう」と批判しながら、「それ（重出立証法）は民俗の地域差そのものに根拠を置く方法だったからである」、と一言でまとめる〔福田1992 68〕。

続いて、いかに重出立証法を実践の学問に利用するかという段階に移る。福田は、「婿入考」（1929年）に「史学対民俗学の一課題」という副題をつけて発表した論文を分析し、民俗学が歴史研究において積極的役割を果たすという柳田の主張について論じる。

福田は、「婿入考」より、歴史の対象に対す

る柳田の学問的主張を2点にまとめた。1つは、民俗（慣習）の土地ごとの相違やおかれた境遇による相違ははじめからのものではないという考えである。すなわち、系統は別ではないという前提もっていた。日本の社会は一つであり、日本の文化は均質であるという考え方である。もう一つは、民俗（慣習）の土地ごとの相違、境遇による相違は、変遷の過程を示しているという考えである。すなわち、もともと同じであったものが、時間の経過のなかで次第に変化していくのであるが、その変化の過程はどこでも同じであり、ただ地域の条件によってその進行に遅い速いがあるだけであるという考え方である。したがって、それぞれの地域の条件に規定されて各段階の姿が残され、地域ごとの相違、すなわち地域差を作っているという認識である〔福田1992 71〕。このように、重出立証法の示唆している実践的曖昧さ、すなわち後の民俗学研究者を悩ませていた方法論の問題を解明する。

柳田は、このような学問的な主張に導かれて、その後の研究対象に向かうが、理論的まとめや実践的方法の指摘が乏しいと言える。

柳田の重出立証法、いわゆる比較研究の主張を支えているもう1つの論点は「方言圏論」である。これは、日本の中央部から最も遠く離れた沖縄に日本の最も古い姿が残されていると考えるとともに、その内側では南北での一致に注目した。中央部としての近畿地方から東西・南北に同じように離れた対称地点には民俗が伝承しているものと予想し、その中央から距離の相違が新旧を表現しているという考えを支柱にして民俗学の方法を確立したものである（福田、1992、76）。更に、民俗学の立場と矛盾することに注意しなければならないと、評価だけでなく、精力的な批判をもする。

三、「柳田國男の歴史認識」について

ここで福田は、「初期柳田の歴史観」、「確立期柳田の歴史観」、「新国学としての民俗学」という3つの段階に分けて論じる。

初期柳田の歴史観は必ずしも地域差をそのまま縦の歴史に並べ替えることができると思っていなかった、と福田は述べる。むしろそれぞれの地域には別の歴史があると考えていた。その最も典型的な理解が、山間奥地の焼畑や狩猟に基盤を置く山人とか山民は、平野部の稲作民とは系譜が異なり、先住民の子孫であり、かつては平野部にも広範に住んでいたが、平野の稲作民の圧迫を受けてついに山間奥地に住むようになってしまったという考えである。あるいは、平野部の農村といえども、どこでも同じ歴史を歩んできたのではないと考えていた。そのことは彼の有名な村落類型論に示されている〔福田1992 81〕。

しかし、確立期柳田の歴史観は、初期と大きく異なる、と福田は述べる。日本列島内であれば、どこでも同じ歩みをするのであり、したがって地域差は一つの歴史的過程を示しているとし、周囲論を比較の基準とした重出立証法によってごくありふれた人々の生活の歴史はあきらかにできると主張し、その研究を民俗学という名前で提出したことに見られる〔福田1992 82〕。

福田はこのような歴史観に基づく民俗学的活用の一面を評価する。しかし、将来の構想として世界民俗学を用意していたが、実際には一国民俗学の確立に邁進し、日本に民俗学を日本以外の民俗と結びつけて解釈し、世界的な視野から解釈することはしなかった。柳田が日本の社会なり文化を世界から切り離して、狭い視野のなかに閉じ込めてしまったことを福田は批判する。

柳田のこのような主張はいわゆる「新国学としての民俗学」に表れている。すなわち、からごころ（儒教）、ほとけごころ（仏教）を排除し、それらが日本に入ってくる前の状態をやまごころ（大和心）として理想化し、やまごころをあきらかにしようとする研究である〔福田1992 87〕。過去に対する熱情は、知的欲求に基づいて、実践的執着から発するものではないにもかかわらず、ここにはいくつかの消極的主

張が見られる。一つは外来思想を排斥したことであり、これによって柳田史学の全面に漂う保守的雰囲気が発生した。二つは実践の構造における過去の契機のみが一方的に強調せられ、過去否定の契機が無視されて、近代文化に対する強い反撥的意識を帯びているとも言えるのである〔家永1957 118〕。

歴史は誰かがつくるのか、歴史的事実として取り扱われる基準は何であろうか？英雄の建国史か、庶民の生活史か？もちろん、歴史は英雄が作ると、あるいは人々の生計を立てる出来事が全て歴史であると、単純に定義できるわけではないだろう。しかし、常に、歴史的事実は現在の説明になり得、現在に影響を与えることを目的として恣意的に利用されうるがゆえに、歴史とは客観的な過去の出来事によって構成されるが、常に主観に基づいて取捨選択されて、歴史的事実として扱われるのである〔浜本1994 189〕。

四、「常民」について

柳田は民俗資料には、空間的・時間的・心意的な特質があり、「歴史」という定説化されてきた学問を、客観的な体系づけられた過去の説明であるというより、対象を広げて、広義な説明を与える新しい分野を作るという出張をもつ。とはいえ、歴史は人間を対象とし、人間の過去の出来事を説明する学問であるがゆえに、文字だけで語られるだけでなく、人間は自分の歴史を無文字でもつくってきているのは確かである。そのため、「歴史」は、過去の出来事を歴史的事実として選択する基準の違いに過ぎないだろう。

この「人間」は、いわゆる「常民」であろうか。次に福田の、柳田の「常民」についての議論に沿って見てみよう。

柳田の『郷土生活の研究法』によると、常民とは農村社会に存在するすべての人をいうのではなく、「極く普通の百姓」という「住民の大部分」であるが、村のオモダチ層は除かれ、ま

た村に居住する非農業の人々も含まれないというものであった〔福田 1992 91〕。なぜ、柳田はこの常民のみが民俗を伝承する基本的な担い手であるというのか。

かつて『山の人生』を、柳田の「転換期」の作品と指摘したように、柳田の常民に対する思想的な形成は非常に重要な段階とされる〔景山 2005 65 189〕。そのため、常民はサンカ、マタギ、木地屋、高野の行人、そして山人と区別される存在であると空間概念の基準で分類されている〔福田 1992 96〕。

しかし、「常民の確立」の段階では、常民として取り扱われる基準が変わる。その時期は「山村調査」と「民間伝承の会」を著した時期であり、これらの論文に柳田の認識的な進化が注目される。いわば柳田の研究関心は1920年代を通過するなかで変化し、民俗学は普通の生活を送る平野部の稲作農民の生活文化の歴史をあきらかにするものとして確立する方向に向かった。その変化は非常民から常民へと、研究対象が移ったことでもある。もはや常民は脇役でもなければ、まして排除されるべき存在を示す語でもなくなった。民俗学の研究対象として常民は学問の中心に据えられることになる〔福田 1992 102〕。

次には、戦後に常民という概念がどのように解釈されるようになったのかをみてみたい。

戦後の多くの民俗学研究者は「常民」を「人間」を区別したり分類したりする概念としては考えなかった。これは民俗学の目的が歴史研究から民族性の究明へと変化しつつあったことに関連する。すべての日本人に内蔵する特質を明らかにするのが民俗学であり、その基礎概念が常民であるということになった。これは柳田以降にむしろ強調された見方である。戦後、常民の理解をめぐる民俗学研究者の間で議論があったが、その議論の過程で提出された有力な見解は文化概念としての常民という理解であり、常民という語に具体的・概念的に定義を与えた〔福田 1992 106〕。

むすび

福田は、『柳田國男の民俗学』の第2章において、柳田の民俗学だけでなく、従来史学の研究方法について、柳田が自分の見解を提示した学問的能力を評価している。更に、民俗学を通して、人間の歴史を明らかにするという新しいアプローチの主張に対して最も高い評価を与えている。

しかし、柳田の歴史認識の限界は、民俗資料の性質に限られる方法論の限界であるからこそ、補足的役割を果たすわけである。つまり、民間伝承は現時点での物事であって、過去の出来事を説明する歴史学にとって、根本的な矛盾が存在する〔家永1953 109〕。このように、歴史学と民俗学とは、人々の考えに深く残ってきた従来からのまなざし、あるいは枠が存在するゆえに、あくまでも基準、あるいは分野が異なり、双方の対象は一致しても取り上げる範囲が異なるのである。

教科書で学んだ歴史の授業では、過去に生じた出来事を時間的に、順序に従って位置づける客観的記録であるが、「構造的時間」という年周期を越えて体系化された時間〔浜本 1994 191〕の、いわゆる「民」の出来事を「歴史」と言わざるを得ないだろう。それゆえ、柳田は、おそらく歴史は過去の出来事の具体的な年代を客観的に説明するという性質を見逃したが、従来史学は、いわば歴史は対象になるあらゆる人間の刻み込まれている出来事を説明する性質をもつ学問であるという側面を見逃していることではないか。

福田は、柳田の新しい方法論の構成、また歴史認識について、非常に客観的な評価を与えた上、本書の「方法と歴史認識」を通して、民俗学、あるいは歴史学の基準・対象として取り上げるべき範囲について理論的な批判を行ったのである。

参考文献

福田アジオ 1992 『柳田國男の民俗学』

吉川弘文間
家永三郎 1957 「柳田史学論」
『日本の近代史学』 日本評論新社
浜本満（他編）1994 『人類学のコモンス
ス』 学術図書出版社

影山正美 2005 「柳田國男『山の人生』につ
いて」
柳田國男研究会『柳田國男・民俗誌の宇宙』
岩田書院